

おもしろおかしく研究開発することをめざして

石 田 耕 三*



我が社の社是は、「おもしろおかしく」とユニークである。学生ベンチャーの草分け的存在である堀場製作所最高顧問の堀場雅夫が自らの経営哲学として示したものである。「人は一生のほとんどの時間を仕事で費やすことになる。その時間をおもしろく感じるか、嫌でたまらなく思うかで、たった一度の人生の密度は大きく異なってくる。おもしろおかしく仕事をすれば生産性も上がり、創造的な考え方を生み出す機会も増える。」という“おもい”からきている。誰しも子供の頃に、飛行機や船の模型やラジオのキットを組み立てたとき、徹夜しても疲れを感じなかったという経験があると思う。今から約30年前にこの社是が発表されたとき、私自身の子供の頃から学生時代までの経験と重ね合わせ、「おもしろおかしく」という言葉に込められた“おもい”に大いに感銘したことを思い出す。

以来、機会ある毎に当社従業員にこの社是の意味を伝え、「おもしろおかしく」業務に取り組めるように努力している。とりわけ、技術開発を基本に事業展開している当社では、新入社員からベテランに至るまで、「おもしろおかしく」研究開発することをめざして日夜取り組んでいる。研究開発においてそれなりの活性化や成果を創出していると自負する半面、次なる発展をめざすには、この哲学をさらに究めることが重要であると認識しているからでもある。

組織の中であって、やりたいテーマにめぐり合えることは稀でしかなく、「おもしろおかしく」を具現化するといったことは単なるお題目に終わってしまいかねない。事実、研究開発の現場は日々この種のジレンマに喘いでいる。しかし、一見矛盾するようだが「おもしろおかしく」の真髓を体感するには、そういったテーマであっても、果敢に挑戦し多くの失敗や苦労を重ねる勇気とそれを克服する努力がいるものである。加えて、チームメンバーと共に夢を語り合うことや、広い視野で客観的に物事を考え、謙虚に行動することも必要である。

私自身はグローバル経営の一端を担いながら、同時に産学連携の研究開発リーダーとしても活動している。そのような日々の取組みの中で、将来を担う研究者、技術者に期待したいことが数多くある。

まず、大学・研究機関とのパイプを太くすることを常に心がけてほしいと思っている。企業では研究開発効率、すなわち成功確率を高めることや開発スピードを上げることが求められる。そのために、自社開発資源の充実や保有コア技術の強化はもちろんであるが、技術革新を確実に捉え、技術補完、強化のための技術導入や技術アライアンスの機会を常に探っておくことが大切である。

また、研究開発に対する取組み姿勢として、一つは、個々人が「オーナーシップマインド」、「おも

* 株式会社堀場製作所 代表取締役副社長 Kozo ISHIDA

い」を持ってほしいということである。自分の仕事に誇りと責任を持ち、プラス思考で自ら研究活動をリードする姿勢を常に持ち続けることが大切である。そのために、専門分野を究める日頃の勉強だけでなく、人としての魅力を磨くこと、自己のアイデンティティをしっかりと示し、自らの考えを理解してもらうためのプレゼンテーション能力を養うこと、リーダーとしてのマネジメント能力を高めることなどにも注力することが必要である。加えて、自らのドメイン技術、市場で世界一・オンリーワンをめざすという明確な目標をチームメンバーと共有することを大事にしてほしい。さらには、科学の進歩や先端技術の発展に貢献しているという意識を忘れずに持ち続けてほしい。

二つ目は、グローバルな視点で行動することを心掛けることである。当社でも、社員の海外子会社への研修・海外の大学への留学など幾多のグローバルに目を向けた育成プログラムを準備している。もちろん、同様のプログラムが用意されている企業も多いと思うが、これらのプログラムやグローバルレベルでの学会発表や技術論文の投稿などに是非積極的に挑戦し、グローバルな経験を積み重ねていってほしい。一会社の一組織内にとどまらず、社会ひいてはグローバルな世界とコミュニケーションすることで、豊かな感性が磨かれ、創造的な成果を生み出すポテンシャルは高まっていく。

創造的研究開発といえば高いハードルをイメージしてしまいがちである。確かに、世の中を動かすような新たな発見や発明をすることは容易でなく、新たな市場を創造するほどの成果はそう易々と出てくるものではない。しかし、経営者や現場のリーダーは、そのわずかな確率に希望を持ち、「なにか！」がある日生まれてくることを根気よく期待している。この確率を高める方法として、小さな成功体験を確実に積み重ねていくことを推奨する。私の経験上でも、小さな成功を繰り返すことで一つの道筋が見えてくるのが少なくなかった。不断の積み重ねしか、大きな成果への近道はないと感じている。

ここまで、将来を担う研究者、技術者に期待することを、私の経験からあえて精神論も含めて述べてきた。終わりに一点だけ付け加えたい。このようにして創造した研究開発成果は、企業である限り製品としてまとめあげて世に出してこそ、真に社会貢献できるものとなるということである。そのときに、これら研究開発成果を知的財産として顕在化させ、把握・認識することも重要なプロセスである。これらを、特許・著作権などの知的財産権として権利化するか、ノウハウとして保持するか、事業戦略と照らし合わせて決めることは、成果を最大限活用するという断面だけでなく、投資の回収という面でも極めて重要であると思っている。これを適切に顕在化させることで、製品の市場での競争を優位に進めることができ、開発者のモチベーションも高まり、次の研究開発への意欲につながる。ここまでのサイクルを廻してこそ、「おもしろおかしく」研究開発できたと実感することができる。

最後に、多くの若手研究開発者が、「おもしろおかしく」のマインドを持って、新たなテーマへ挑戦し、創造的な成果を生み出し、社会の発展に貢献されることを願ってやまない。